

研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題 「子どもを支える保育—評価を通して—」

研究期間 令和2年度～令和3年度

研究代表者 上越教育大学附属幼稚園 園長 内藤 美加
同 園長 安藤 知子（令和2年度在籍）

研究組織 同 副園長 泉 真理
同 教諭 大坪 千恵子（令和2年度在籍）
同 教諭 黒田 隆夫
同 教諭 長谷川 裕美
同 教諭 中山 卓
同 養護教諭 高瀬 育子
上越教育大学 准教授 白神 敬介

■研究の概要

1 研究テーマについて

本園では、平成 25 年度から「遊び込む子ども—学びの基盤に着目して—」というテーマのもと、研究に取り組んできた。遊び込んでいる遊びにはどのような様相が見られるのか、その中で幼児の内面にどのようなものが生み出され、それを積み重ねる中でどのような力につながるのかを明らかにし、幼児の遊び込む姿を支える教師の援助や環境構成を探ってきた。平成 28 年度からは、「遊び込む子ども—教育課程の創造—」とテーマを設定し、遊び込む幼児の姿とそれを支える教師の援助や環境構成の分析を通して、従来の教育課程の見直しを進めてきた。そして、平成 30 年度末に、それまでの研究の総括として、これからの新しい時代を自らの力で生き抜く子どもを育む新しい教育課程を提案することができた。

一方で、平成 30 年 4 月から幼稚園教育要領が全面実施となった。総則の「第 3 教育課程の役割と編成等」の中では、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下、「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする」とあり、「第 4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」の中では、「幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること」や「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」と記されている。作成した教育課程や指導計画に基づいて保育を実践しながら、その内容や教師の援助、環境構成が幼稚園教育において育みたい資質・能力を育成することにつながっているのか、幼児一人一人の姿に照らして適切に評価することが求められている。

また、平成 30 年 6 月に「幼児教育は、生涯にわたる人格形成やその後の義務教育の基礎を培う重要なものであり、全ての子供に質の高い幼児教育の機会が保障されることが求められている」という趣旨のもと、「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」が設けられた。令和元年 10 月から幼児教育の無償化が実施される中で、幼児教育の質の確保・向上に向けた議論や検討が行われ、各幼稚園等においても運営の改善・発展を図る取組が求められている。

このような幼稚園教育を取り巻く状況がある中、本園では、令和元年度より研究テーマを「子どもを支える保育—評価を通して—」とした。平成 30 年度末に完成した新しい教育課程や年間指導計画に沿って保育実践を行い、その保育が幼児の育ちを支えることにつながっていたか、評価する手立てを探ることにした。また、従来から行ってきた保育記録の方法を見直し、より具体的に指導の過程を振り返り、教師が行った援助や環境構成などが幼児の姿の変容や発達を支えるものになっていたか、

または改善につながっていたかを評価できるように、保育記録に載せる内容や記述の仕方を検討することにした。

令和元年度は、保育の質を高める評価の方法として「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」の4つの仕組みを整えた。日々の記録や語り合いといった振り返りのサイクルを充実させることで、保育改善を進めてきた。職員間で保育を語る機会が増えてくると、個々の保育の捉えに方向性があることが見えてきた。しかし、保育を評価するしくみを整える中で、どのように幼児の豊かな育ちを支えたと判断するのか、幼児の姿と教師の指導のかかわりのレベルで検討することまでできなかった。幼児の育ちを支えていくには、まず、幼児のどのような姿に価値をおき、どのような力をはぐくむのか、職員間で目指す方向を具体的に共通理解して保育に臨む必要がある。そして、その姿や力に照らして、自分たちが行った環境構成や援助を評価し改善することが欠かせないが、教師が行った援助などをどのように判断したらよいのか、その考え方を整理していくことが課題と捉えた。そこで、本研究では、「こんなふうに育ってほしい」と考える姿に照らして、教師が行った援助や環境構成などが幼児の育ちや学びを支えるものになっていたか、またはそのための改善になっていたのか、判断する考え方、すなわち保育の評価観といえるものを探っていくことにした。また、保育を評価するしくみや考え方が、幼児の育ちを支え、より質の高い保育を実践するためのものになっているかどうかを、外部の研究者や他園の職員らとの意見交流を通して見直していくことで、より質の高い保育につながるのではないかと考えた。

2 研究計画

第1年次（令和2年度）

- ① 本園における保育の方向性や幼児のどのような姿に価値をおき、どのような力を育みたいと思っているのか、具体的な共通認識を得るとともに、担任、副担任、養護教諭、教育補佐員からなるカンファレンスの中で話し合い、評価する考え方を整理していく。
- ② 保育の実際場面でのエピソードの映像や記録を手がかりに、カンファレンスで整理された保育の評価の考え方や方法について検証する。

第2年次（令和3年度）

- ① 保育を評価する4つの取組のサイクルを継続的に実践する。。
- ② 日々の保育を振り返り、カンファレンスを重ねながら評価観について語り、更新する。
- ③ 保育の評価について、外部や他園と意見交流を行いながら捉え直す。

3 研究方法

(1) カンファレンスでの語り合い（令和2年度）

カンファレンスの中で、幼児のどのような姿に価値をおきどのような力をはぐくみたいと思っているのか、目指す姿や力を具体的に語り合い、共通認識を得ていく。そして、その姿や力に向かって保育を進める中で、実際の保育場面を取り上げながら、目指す方向に対して、教師の環境構成や援助が適切だったことを、何をもって判断するのか、評価する考え方を全員で話し合い、整理していく。

(2) 保育記録の蓄積と事例の集積（令和2年度）

日々の保育を振り返る際の具体的な資料として、遊び保育記録を活用する。それをもとに、教師が行った援助や環境構成などが幼児の姿に照らして適切だったと判断できる手がかりを探ることができるのではないかと考える。また、保育実践からエピソードの収集を行い、保育を評価するときの考え方に つながる事例を残していく。

(3) 保育を評価するサイクルの継続的な実践（令和3年度）

1年目に整えた保育の評価の取組について、2年目も年間を通して継続的に実践する。職員間で保育を語り、記録を読み合う機会を密にし、幼児の育ちの支えになっていたかどうかについて、評価していく。また、保育実践からエピソードの収集を行い、保育を評価するときの考え方に つながる事例を残し、検討の材料としていく。

(4) カンファレンスによる保育の評価観の更新（令和3年度）

第2年次研究で明らかになった評価観について、保育実践を行いながら捉え直す。本園が大切にしてきた保育の捉え方をより確かなものにするために、項目の変更や増減も考えながら再構築していく。職員が保育を通して感じた迷いや悩み、喜びなどを語り合い、共感したり一緒に考えたりすることで、園で大事にしたいことが鮮明になり自覚化され、共有されていくと考える。

(5) 評価の取組の発信と、他園との交流による意見交流（令和3年度）

保育を評価する取組について、第三者的の視点からどう受け止められているのか、独自性がどこにあるのか、そしてどのような価値があるのかについて、他園と意見交流を行う。新型コロナウイルス感染症防止対策を踏まえ、オンライン会議も取り入れた交流会を上越市内または県内外の幼稚園、保育園、こども園などに依頼する。

(6) 研究保育と研究会の実施

研究保育では、研究協力者から定期的に保育を参観してもらい、本園の研究 について助言を得る機会とする（年2回）。また、幼児教育研究会を実施し、研究協力者や参会者から意見を得たり、幼児教育関係者から講演してもらったりすることを通して、研究の方向や保育の新たな視点を獲得する場とする。

4 研究の成果と課題

(1) 令和元年度の取組から

平成 30 年度末に完成した新しい教育課程と年間指導計画に沿って実践を進めながら、日々の保育について振り返り、保育記録に残す内容や記述の仕方を検討してきた。その結果、以下のことが見えてきた。

本園における保育の評価のしくみ

本園では、保育における評価を「幼児の発達する姿に照らして、教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り、改善を図っていくこと」と捉えた。そして、保育を振り返る具体的な資料である保育記録と、保育についてより多くの教師で語るカンファレンスの見直しと検討を進めてきた中で、本園における保育を評価するしくみが整えられてきた。それが次の表である。

期の始まり		週 → 月 →	期の終わり
月～木	金	→	各クラスで期の振り返り →カンファレンスで共有
振り返りタイム →保育記録記入	振り返りタイム →保育記録記入		
水曜日カンファレンス	のびのび保育シート作成		
*太枠を毎週繰り返す			

表 1 保育を評価するしくみ

しくみを構成する「4つの取組」

①保育記録

毎日 10 分の振り返りタイムを設け、副担任とその日の保育について振り返った。自分の保育を振り返る材料である保育記録がより有効なものとなるためには、右の 5 つの視点について記録することが効果的であることが見えてきた。毎日書き加えていくことにより、幼児がどのように遊び

を深めていったのか、遊びへの興味がどのように移っていったのか、そこから幼児の内面を読み取り、援助を考える「改善のサイクル」が回るようになった。



図 1 保育記録の内容

②のびのび保育シート

これまでの週案を、保育記録をもとに保育を改善するサイクルが視覚的にも分かる様式に変え、「のびのび保育シート」と呼ぶことにした。シートは毎週作成し、一年間の保育の改善の足跡が蓄積される。期の振り返りでは、その蓄積したのびのび保育シートをもとに行っている。また、他の教師がどのように幼児の姿を捉え、どのような心もちで援助しているのか、情報を共有するツールにもなっている。

- ①「保育記録」
1週間分をまとめた保育記録をデータ化した記載。
- ②「教師の振り返り」
その週の中で話題になったことや気付いたことなどを「教師の振り返り」として、保育記録の横や下に記述。
- ③「次週に向けて」
①②の振り返りをもとに、次週に向けて考えたことや意識したいことなどを記述。
- ④「週の計画」
①②③を受けて作成した次週の計画を記述。



図2 のびのび保育シート

③カンファレンス

毎日行う 10 分の振り返りタイムと水曜日に行うカンファレンスの 2 種類のカンファレンスを行ってきた。立場や経験年数に関係なく、自分の迷いなど話したいことを話す中で、自分の保育を多面的に捉えたり主観を磨いたりすることにつながり、保育に活かすようになった。また、無理なく続けられるように短時間で効率よく行ってきた。

カンファレンスのPoint

- 時間を意識する
- 「話したい」ことから話す

<水曜カンファレンス>

- ・ 茶話会の雰囲気大切に
- ・ 誰でも気軽に話す
- ・ 話題は保育についての迷いや悩み、面白さなど、何でもOK

図3 カンファレンスのポイント

④期の振り返り

保育を改善するサイクルを繰り返しながら、期の終わりには、その期全体を通して幼児の姿の変容や教師が行ってきた環境構成や援助についてまとめの振り返りを各クラスで行った。日や週とは違った、期という長いスパンだからこそ捉えられる幼児の姿があり、また教師の援助についても長い目でその効果を検証することができた。

(2) 保育の評価観を導き出すカンファレンス

令和元年度で整理した評価のしくみを活用し、幼児の姿と教師の援助や環境構成のつながりについてカンファレンスで議論する中で、どのような幼児の姿を目指して保育を進めていったらよいのか共通理解ができていないという課題が見えてきた。そこで令和2年度の取組として、保育に携わる職員でカンファレンスを行い、本園における保育の目指す方向性について具体的に語り合いながら、考えを整理し、共通認識を

導き出すことにした。ここで参考にしたのが、マーガレット・カーの著書『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』（大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 ひとなる書房 2013年）にあるアセスメントモデルである。これは、幼児をアセスメントするためのモデルだが、幼児のしていることを「幼児の学び」という視点に立って見るというところに、幼児の姿に照らして援助の改善を行っていく本園の保育に通じる点を感じ、保育の評価を考える観点として活用することにした。そのアセスメントモデルを参考にした観点に沿って、カンファレンスを行った。カンファレンスでは、事前に観点に沿って、それぞれの考えを付箋に書いて持ち寄り、KJ法を用いて語り合いながら共通認識を導き出した。マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした保育の評価を考える観点とカンファレンスで得られた本園の共通認識は次の通りである。

マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした項目		カンファレンスで得られた共通認識
①	何を目的に保育の評価を行っているか	幼児の自ら育とうとする力を支える
②	幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか	よりよく生きる力の基礎を育む
③	保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか	幼児のしていることを肯定的に捉える
④	どのように妥当性を確認しているか	職員の語り合いによって共感・合意を得る
⑤	保育の質の向上をどのように捉えているか	幼児の姿をもとにした援助のレパトリーが広がる
⑥	どのように評価しているか	本園の保育を評価するしくみに沿って行う
⑦	教師にとってどのような価値があるか	みんなが笑顔で前向きになれる

表2 カンファレンスで得られた本園の共通認識

この共通認識はこれまでも本園で大切にされてきた内容であり、本園の保育を評価する際の指標になると言える。研究紀要ではこれを植物に例えて表現した。



図4 7つの評価観（令和2年3月時点）

(3) エピソード事例の検討

カンファレンスは、教師それぞれが保育場面を想起しながら考えを語り合うものだった。そこで得た共通認識が実際の保育場面でも言えるのか、保育記録からエピソードを取り上げ、事例に書き起こして検証することにした。エピソード事例は実際に行われた保育実践における教師と幼児の姿を記録した事例である。教師はエピソード事例を各期に一事例書き、それを互いに読み合って、幼児の姿の読み取りや援助に向かう考え方など大切だと思った部分や共感した部分にそれぞれがマークを入れコメントを残した。そして、それぞれがマークしたポイントやコメントを一つに集約し考察を加え、「エピソード事例～やっぱりそうだね納得版」としてまとめた。これをもとに、自分たちの保育をどのように捉えているのか、それぞれが保育をするうえで大切だと考えマークしたポイントが、私たちが保育を振り返って幼児の育ちにつながったのか判断するときの視点にもなっているということが分かった。また、エピソード事例の検討から得られた本園の保育の特徴的な考え方とカンファレンスから得られた共通認識と照らしてみると、そこに共通性があることも見えてきた。

<5歳クラス Ⅸ期 5月>「遊びたくなる場と材」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症予防に係る臨時休園のため今年度の幼稚園生活は1か月遅れで始まった。感染症予防の観点から、基本的に遊びの時間は園庭で、生活の場は保育室でと、限定しての再開である。登園が再開されると気の合う友達との再会を喜ぶ姿が見られた。一方、どこで何を遊んだらいいのか戸惑う幼児も数名いた。これまでは保育室、遊戯室、園庭と遊びたい場所で自由に遊ぶことができた。コロナ禍で外遊び中心の生活になり、年長児になった不安や戸惑いに加え、これまでどのギャップを感じているようであった。振り返りタイムでは、新しい環境に慣れて安心感をもって過ごせるように、担任も副担任も幼児と花を摘んだり虫を探したりするなどして一緒に遊ぶようにした。また「外、つまらない」という戸惑いから発せられた**幼児のつぶやきから、外でも楽しいと感じられるような環境構成や援助について話し合い模索していた。**このような中、摘んできた花をすり鉢ですり潰し、色水をつくる幼児がいた。このように思い付いたことを試す姿を支えることで、外での遊びが広がっていくのではと考え、5歳クラス周辺の環境構成を見直すことにした。

登園が再開し、A児をはじめ何人かの幼児は、新しい遊具で遊んだり教師と園庭を散策したりして過ごしていたが、これといってやりたい遊びが見付からない様子であった。前年度担任からA児は製作遊びを好み、保育室で遊ぶことが多かったと聞いた。その話から、室内遊びが好きな幼児にとって、広々とした園庭は所在なく落ち着かないのではと感じた。保育室の製作テーブルのように、遊んだり集ったり話したりできる居場所が園庭にもつくれなかつたかと考えた。そこで**色水遊びを5歳クラス児が始めた機会に、花壇付近の環境を見直した。**丸太椅子やテーブルは和やかさができるようにテーブルクロスを敷き、プランターをその周りに配置することで、色水遊びコーナーのようになった。広い園庭でもプランターでゆるやかに囲まれていることで、落ち着いて過ごせるのではないかと考えた。

幼児が登園する前に、**5歳保育室の先にある花壇の周りに丸太椅子やコンテナボックスを置き、テーブルクロスを敷いておく。側にすり鉢やすりこぎが入ったワゴンを置く。その一角をゆるやかに囲むように、パンジーが咲くプランターを配置しておく。**

コメントの追加 [h1]: 幼児のつぶやきや姿を受け止めて環境構成を考える。環境を通して働きかけながら、幼児が主体的に遊んでいくようにする。(よりよく生きる力)

5月21日

A児が集めたカラスノエンドウの種を持ってくる。種をさやから取り出し、すり鉢ですり潰す。

A児:「先生、見て」

教師:「Aちゃん、この種で色水つくったの?」

A児:「うん」

教師:「春色のスープみたい。やさしい色だねえ」

A児:「うん」

B児:「ぼくもやりたい」

B児の他にも5歳クラス児が仲間入りする。

B児:「どこでやるのかなあ」 辺りを見回す。

教師:「ビールケース使う?」

B児:「うん」

教師がビールケースとテーブルクロスを持ってくる。B児はそれらをテーブルに見立て、カラスノエンドウの色水をつくる。



この日、A児はカラスノエンドウの種を集めると**自然な流れで**色水をつくり始めた。教師は、A児が安心感をもって遊び続けられるように、A児に話しかけたり称賛の言葉をかけたりした。ワゴンの周りに興味をもった友達が集まってきた。**やってみようとする意欲をまずは大切にしたいと考え、教師が**

図5 エピソード事例～やっぱりそうだね納得版

カンファレンスとエピソードの二つの検討から、私たちが保育を行っていく中で、目指しているものが言語化され焦点化された。保育の評価とは、目指している幼児の姿や保育のあり方に照らして行うものと考えているため、二つの検討から得られた共通の考え方が本園における保育の評価観として、保育を評価する際の拠り所になると言える。しかし、これは現時点の考え方であり、また一度見出したからといってそのまま固定化するものではない。評価の考え方も、保育の振り返りと同じように、私たちが目指す保育につながるものとなっているのか話題にしながら更新し続けていくことが必要であり、それが保育の質の維持・向上につながるのではないかと考えた。カンファレンスとエピソード事例では、どちらの検討にも、全ての保育者が参加した。毎回のカンファレンスに全員が揃うことは難しかったが、「本園で保育を行っている教師全員で本園の考え方を導き出す」という思いのもと、研修のもち方を工夫してきた。そうした進め方により、保育の評価観について一方的に与えられるのではなく、教師一人一人が自分事として捉えることができた。

(4) 「4つの取組」の実践を通して見つめた本園の目指す方向性

令和3年度は、「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」で構成される保育の評価の「4つの取組」を継続的に行い、幼児の姿をもとにその効果について検証することにした。まず、水曜カンファレンスの始めに、保育について「言いたい」ことを一人ずつ端的に伝える「ブレインストーミング」形式の話合いを取り入れた。環境構成によって見えた幼児の姿や、保育を行って感じた悩みなど、それぞれが思い思いに語る。一見、バラバラに見える発言だが、全員が話し終わる頃には、話題に共通の視点が見えてきた。例えば、「遊びの中での教師の立ち位置」や「声のかけ方」などである。また、端的に意見を述べる形式のため、「もっと聞きたい」と思った意見には、「もう少し詳しく教えてほしい」といった発言が自然と出てきた。活発な意見交流へとつながっていく中で、今の保育に対する関心事やテーマが見えてきた。

5月の水曜カンファレンスでテーマに挙がったのが「保育で使う言葉、使わない言葉」である。遊びで思考を促したい場面やトラブルの場面、異年齢での遊びの場面など、保育の様々な場面でどのような言葉かけを行っているのか、そしてそれはどのような意図があるのかといった内容で、付箋紙でグループ分けをしながら話し合った。その際、新しく異動してきた職員から「不安」や「迷い」の言葉が多く聞かれた。どのような言葉かけが幼児の遊びを広げ、そして深めることにつながるのか、4月当初は非常に迷いながら保育を行っていたという。それが、日々の振り返りタイムやカンファレンスを行う中で、少しずつ本園で大切にしていることが分かり、保育に活かすことができるようになったという意見だった。また、本園の保育に長く携わっている職員からは、本園の保育の特徴について改めて確認するきっかけになったという意見も聞かれた。経験年数に関係なく保育を語り「合い」、そして語り「続ける」ことで、自然と同じ心もちで保育を行うことにつながることが見えてきた。

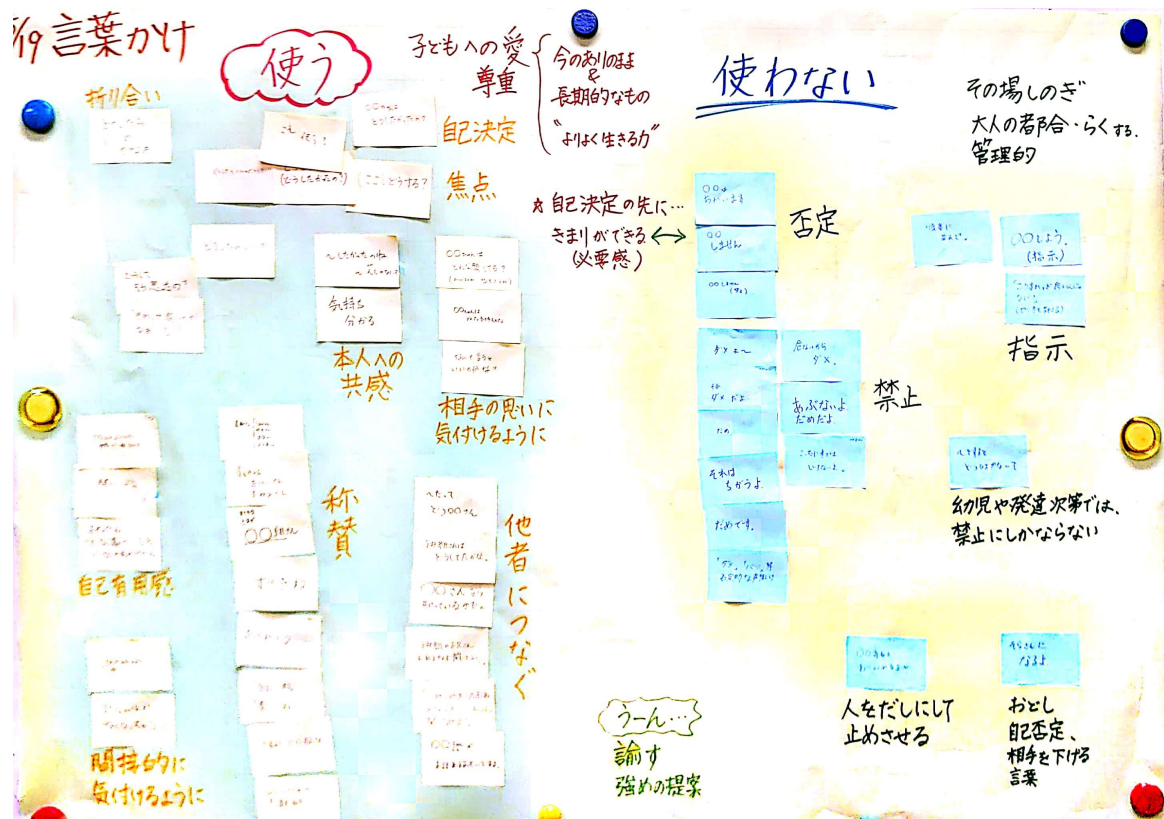


図6 水曜カンファレンス「保育で使う言葉、使わない言葉」

6月のカンファレンスで話題になったのは「遊びの伝承」である。本園で幼児が行う様々な遊びは、基本的に教師が「やろう」「こんな遊びがあるよ」と提示されて行うものではない。雨どい遊びを例に挙げる。砂場まで雨どいを連結し、水を流す遊びは、教師が教えたものではなく、年上の幼児が行ってきた遊びを年下の幼児が見て、一緒に遊ぶ中で学び、身に付け、自分たちで遊ぶことができるようになった遊びである。年上の幼児から年下の幼児へと遊びが受け継がれていくことを「遊びの伝承」と称し、そのメカニズムがどのようなものなのか、そして教師はどのような援助や環境構成で遊びを支えていくとよいのかについては、これまでもカンファレンスで時折話題になっていた。

ある日の遊びの場面で、4歳クラスの担任は、A児の遊びの姿を捉えた。A児は、年上の幼児が行うビールケースを使った立体的な雨どいの組み立て方に興味をもち、それを毎日じっと見ていた。「A児の主体的な遊びのかかわりを支えたい」、そう考えた担任は、副担任との振り返りでA児の姿を情報共有した。そして、共通の援助として、教師が主導して雨どい遊びを一緒に行うのではなく、砂場にいた年上の幼児とA児をつなぐことにした。年上の幼児はA児の問いかけに快く応じ、組み立て方やコツを伝えながら優しくかかわる姿が見られた。A児は嬉しそうにかかわりながら雨どい遊びを楽しんでいた。その様子を担任は振り返りやカンファレンスで職員に詳しく伝えた。年上の幼児とのかかわりがA児の主体的な遊びにつながったと捉えた5歳クラスの担任は、年下の幼児に遊びを伝えるための援助や環境構成の在り方について考えるようになり、また3歳クラスの担任は、発達段階

に合った雨どい遊びの基盤となる材や活動場所について他の職員と共通理解するようになった。A児の遊びの姿を発端として、雨どいを媒体とした一貫性のある保育につながったのである。3歳児Ⅱ期、4歳児Ⅵ期、5歳児Ⅹ期のエピソード事例に、どのクラスでも雨どい遊びが取り上げられたことから、カンファレンスを通して、遊びの伝承を支える保育の在り方を職員全体で考えるきっかけになった。



本園が取り組んでいる「4つの取組」の大きな特徴は、どれも「他者を經由する」ところにある。自身の保育について考えたことを他の職員に伝える、または書いたものを読んでもらう。そして、そこで得た考えをもとに、保育の共通性や課題を見出し、明日の保育につなげていく。そうした取り組みの結果、自身の保育に共感・納得し、より保育の質の向上につながる考えや支援を得ることにつながるのである。職員に、保育に関して他の職員と語った頻度について尋ねたところ、ほとんどの職員が以前より保育について話すようになったと自覚していた。「語り、更新する保育」は保育の質の向上に効果的であることが見えてきた。

(5) カンファレンスの継続で見えてきた新しい評価観

カンファレンスの際、1年目で見出した7つの評価観の図を掲示し、話合いの最後に振り返ることができるようにした。その中で、保育中やカンファレンスで多く意識していた項目は表2の③④⑤であること、①②については保育の評価全体の価値観を捉えたものであり、保育の基盤として教師の心持ちの根底にあることが見えてきた。これらの7つの評価観を植物に例え、一枚一枚の葉で表現してきたが、2年目は保育の評価を継続的に実践することを通して、幼児や教師、保護者など、「みんな」が笑顔になる姿を思い描き、植物が生長する姿として表現した。

9月に行われた水曜カンファレンスで、複数の職員が現在の心持ちや心境について語る場面があった。そこでは、「カンファレンスで不安なことが共有できたので、自信がついた」「心配事があっても自然と職員が寄り添って声を掛けたり助けてくれたりするので、保育をするのが本当に楽しい」といった前向きな意見が聞こえてきた。保育を一体感をもって評価し、更新していく取組が円滑に動き始めたと捉える一方、「保育を評価する上で大切にしていることは何だろう」「この取組が効果的に働くためのポイントは何か」ということに職員の関心が向き始めた。



そこで、翌週の水曜カンファレンスで「保育を評価する上で大切にしていること

は何か」と題し、それぞれが捉えた評価観を付箋紙で集約しつつ、そこから共通認識を得ることにした。「多様な意見が出る中、語り合い、伝え合うことそのものが重要なのではないか」、そしてそれが「持続可能で一緒に頑張りたいと思えるものであることが大切なのではないか」という意見にまとまった。正解のない保育を日々行う中で、自己評価にとどまらず、常に他の職員と語り合い、自己の保育について捉え直し、価値観を共有する過程、すなわち評価のプロセスそのものが、保育を評価する上で最も大切なことであると捉えた。そこで、新しく8つ目の評価観として、「保育を評価する上で大切にしていることは何か」を加え、そこで得た共通認識を「語り、考え続けるプロセス」とした。

項目	共通認識
① 何を目的に保育の評価を行っているか	幼児の自ら育とうとする力を支える
② 幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか	よりよく生きる力の基礎を育む
③ 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか	幼児のしていることを肯定的に捉える
④ どのように妥当性を確認しているか	職員の語り合いによって共感・合意を得る
⑤ 保育の質の向上をどのように捉えているか	幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる
⑥ どのように評価しているか	本園の保育を評価するしくみに沿って行う
⑦ 教師にとってどのような価値があるか	みんなが笑顔で前向きになれる
⑧ 保育を評価する上で大切にしていることは何か	語り、考え続けるプロセス

表3 カンファレンスで得られた本園の共通認識

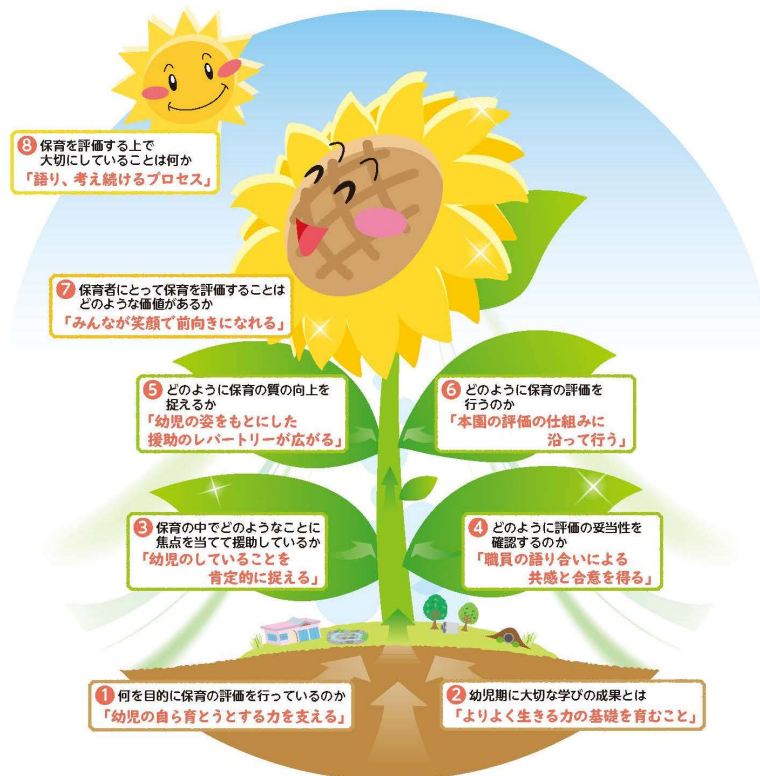


図7 カンファレンスを通して見出した8つの評価観（令和3年3月時点）

(6) 他園との交流を通して

本年度は、研究協力園である妙高市立よつばこども園、上越市立はまっこ保育園、いずみ幼稚園の3園に協力を依頼し、保育の共通性や心持ちについて相互理解すると共に、本園の保育の評価について意見を得る機会を設定した。交流会では、遊びが継続するための声かけによる援助について議論を深め、共に援助のレパートリーを広げることができた。また、互いのクラスの幼児の姿から見えてきたことを共有し、新たな援助の方向性について検討することができた。

9月1日、8日に協力園の職員を招き、本園の保育とカンファレンスを参観すると同時に、本園が行っている4つの評価の取組について意見を得る機会を設けた。短時間で濃密かつ言いたいことが言える振り返りになること、同じ年齢クラスだけでなく、様々な職員から意見を得ることが、保育を見つめ直すことに効果的であることを実感することができた。また、4つの取組を通して、職員一人一人が「自分の振り返りや記録の形をつくっていくことができる」という意見が出た。比較的自由的な記述方式、言いたいことを言えるカンファレンスの場の設定によって、保育に対する不安の解消や、より濃密な保育の連携につながるのではないかという意見も得ることができた。課題として、保育を評価するための「時間」と職員間で保育を語る「機会」を、どう捻出していくか、どのような記録をとるのか、本園を含むどの園でも振り返りにかける時間を確保することの難しさが浮き彫りになった。これについては、すぐに解決できるものではないが、継続した意見交換が改善に向けた糸口になりつつあることが見えてきた。



(7) 語り、考え続けることから見えてきたもの

2年間の研究実践で見えてきたことは、「つながる」「続ける」ことの効果である。一人の保育者が毎日、誰かと保育について語り、考え、記録に残し、そしてそれを他の保育者に読んでもらう。聞いた、読んだ保育の仲間がその意味、意図を読み取り、協力したり、自己の保育に生かしたりしていく。実際に保育に携わっていない第三者の評価によって、自分の保育を客観的な視点で再認識し、保育の更新につなげていく。このような実践の連続によって、保育がよりよい方向へと確実に更新されていることを実感することができた。

5 研究成果の発表状況

1年目の成果については、平成28年10月5日に本園において第24回幼児教育研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、平成29年3月に研究紀要を発行した。

2年目の成果については、平成29年10月11日に本園において第25回幼児教育

研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、平成 30 年 3 月に研究紀要を発行した。

6 学校現場や授業への研究成果の還元について

新潟県教育委員会主催の保幼小合同研修会、県立教育センター主催の幼稚園等新規採用教員研修、本学の学習場面臨床学の实地指導等において、本園職員が講師または指導者として参加し研究の成果を伝えた。来年度も、全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会での事例発表や新潟県教育委員会主催の幼稚園等新規採用教員研修の保育参観研修の指導者として、研究成果を還元していく予定である。また、上越市や妙高市、糸魚川市、津南町から研修会の講師や保育参観の依頼があり、研究の一端を還元した。次年度以降も、研究会や様々な研修会の機会をとらえて研究成果を発信すると共に、上越地域や県内の園や行政に積極的に働きかけ、還元方法、還元先を拡充していきたい。